

寄稿

ロバート・バトラー先生

## 樋口恵子

Keiko Higuchi

NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長

ロバート・バトラー先生が83歳で急逝されたと伺って、バトラー先生にこそ100歳まで生きて、意欲と尊厳に満ちた高齢者のモデルになっていたかかった、と心から残念です。同時に83歳でコロンビア大学教授を受諾し、これから新しい研究に取り組むご予定だったと聞き、先生は最期まで高齢者の模範を世に示された、と感じ入りました。

私とバトラー先生の出会いは、ごく一時期に限られています。こちらは強烈な印象を受けています。

最初は1987年朝日新聞社主催の老いを考えるシンポジウムに、基調講演者として来日された時でした。私は大熊由紀子さん司会のシンポのメンバーとしてご挨拶しました。高齢者だけでなく介護にたずさわる家族とくに女性に向けて、愛情ある関心を寄せていただいていたので感激しました。

翌1988年、今度はアメリカ、ニューヨークで笹川記念財団の後援によるシンポジウムにお招きを受けました。日本からも各界男女数人が参加し、私などその他大勢の一人でしたが、私にとって画期的な体験でした。第一に英語の初スピーチ。日本語でよいとばかり思っていたので、英語の原稿の用意なし。バトラー先生の愛弟子大迫政子さんにすっかりお世話になりました。第二

に、ベティ・フリーダンの断固たる老いの否定と挑戦のスピーチに接したこと。同じ挑戦でもバトラー先生の老いを受容の上での挑戦とはかなり違う印象を受けました。フリーダンさんとは1995年、東京で再会、東京新聞紙上で対談しています。第三に、バトラー先生がご自宅で開いてくださったパーティで、グレイパンサーズの創設者マギー・クーンさんにご挨拶できたこと。小柄でほんとかわいらしいお方でした。今のグレイパンサーズのリーダーは、私より10歳以上若い方ですが、いつも「私はマギー・クーンと会って握手したのよ」と言って羨しがらせています。

洗練された身ごなし、絶やさぬ微笑。私はバトラー先生は東部の典型的な中流家庭で裕福に育った方と思い込んでいました。今回初めてご苦勞の中で祖母上に育てられたことを知りました。2004年に私は、「祖母」への認識を高め、世代間交流をすすめる必要を『祖母力』という本にまとめました。一部をベルリンの国際会議で発表した英訳もありましたので、ぜひお目通しただきたかかったと残念に思います。

バトラー先生の偉大なご業績を偲びながら、不屈の精神でロバート少年を育て上げた祖母上のお力にも感謝を捧げたいと存じます。



アメリカの初期女性解放運動を牽引した  
ケイト・ミレット女史(右)と筆者